

二〇二四年八月三〇日

風鈴の早鐘となる秋風裡  
独り居となりし父訪ふ台風裡  
ごみ出しは中止とならず台風裡  
野分の夜ニュースに返す独り言  
にわたずみ大地にいわし雲広ぐ  
栗を焼く丹波の匂ひ転がして

むべ  
康子  
せいじ  
やよい  
かえる  
よし女

二〇二四年八月二九日

豊漁というに高値や初秋刀魚  
海鳴りを間遠に避暑の客となる  
嵐来と摘み取る仕舞ひとマトかな  
金平糖地にこぼすごと百日紅  
花舗の軒鈴虫籠の吊られけり

ぼんこ  
澄子  
うつき  
むべ  
山椒

二〇二四年八月二八日

蟻一匹類杖の腕のぼり来し  
乱れ萩束ね嵐にそなへけり

なつき  
澄子

二〇二四年八月二七日

大壺に聳ゆ芒や茶屋の土間  
秋の陽の綺羅を零せる作り瀧  
刈り取りし牧草ロール昼の虫  
一陣の風に秋立つ明日香道  
落蟬の乾ききつたる軽さかな

もとこ  
かえる  
千鶴  
明日香  
うつき

二〇二四年八月二六日

石垣のお堀を埋む蔦かずら  
更けてなほ冷めぬ大地よ星月夜  
寝つかれぬ一間窓を月渡る  
残暑なほ西窓の戸は閉めつきり  
滝道を辿り辿りて奥院へ

ぼんこ  
かえる  
むべ  
せいじ  
風民

二〇二四年八月二五日

秋簾むしの蛻をつけしまま  
辻地藏ろうそく揺るる晩夏かな  
眠られぬ臥所に激し稲光  
山城へ葛の花咲く九十九折れ

かえる  
みきえ  
うつき  
澄子

二〇二四年八月二四日

神官の高き杵音秋祭り  
白糸を吐くやうに咲く烏瓜  
くつきりと大三角や星月夜  
海峡を渡る構へや鬼やんま  
孫樂し迷路あそびす墓参かな  
窓少し開け枕とす虫の声  
片陰を押ししてカットへ車椅子  
靴はいてとび跳ねあそぶ浴衣の子

よし女  
むべ  
千鶴  
うつき  
康子  
むべ  
せいじ  
あひる